

シャム双生児と太極図

— John Barth の “Petition” について

小林 史子

John Barth の *Lost in the Funhouse* (1968) は、互いに有機的関連性を持つ14の短編から成立する短編集である。これを一編の novel と見なす学者もいるほどだ (Schulz 398; Slaughter 81)。しかし、どの短編にも独立性があり、短編集になる前に半数は別個に雑誌に発表されてもいるから、これを限りなく novel に近い連作集と呼ぶのがもっとも適切であろう。

その第6番目に位置するのが “Petition” である。タイトルが示す通り、これは見世物で暮らしをたてているアメリカ在住のシャム双生児の一人が、1931年に訪米中のタイ国王に宛てた嘆願書である。もともと正反対の性格ゆえに仲の悪かったシャム双生児が同一の女性に恋したために危機的状況に陥り、死の危険性を承知しつつも、耐え難い状況から脱するため国王に分離手術実施命令を願う、といった内容である。

連作集の他の13編が少年 Ambrose、および現在この連作集を書きつつある「作者」(成人した Ambrose だと考えられる) に関係するか、もしくはギリシア神話に題材を得たものに分類され(もちろん両方のカテゴリーには関連性がある)、そのうちの幾つかは奇抜な技巧を駆使した明白なメタフィクションであるのに、“Petition” には一見したところ、Ambrose も「作者」もギリシアの英雄も登場しないし、技巧面では Barth 初の書簡体形式が採用されていることくらいしか言及すべき点がない。

そのせいだろうか。いや、それ以上にシャム双生児が区別を不明瞭とする対立物のメタファーであることがあまりにも明白であるためかもしれないが、同連作集の他の短編と比べると、“Petition” はこれまであまり詳しく論じられてこなかったようだ。1980年代以降、この作品を重視する学者が増えてきた感はあるのだが、それらの学者たちにしても双生児が体現する二項対立のアレゴリカルな意味を提示するのみで事足り、としているように思われる。

双生児というメタファーは、たとえば Robert Rogers が *A Psychoanalytic Study of the Double in Literature* (1970) において詳細に考察しているように、分身や影とならんでアイデンティティにまつわるテーマを扱う作家に好まれてきたし、自身が双生児として生を受けた Barth は多くの作品に双生児を登場させている。しかし、これは「シャム双生児」についての物語である。「二重体児」の観点からばかりでなく、いわば「シャム」の部分——作中で幾度となく言及されるタイ国王や東洋思想のことだ——からも考察してしかるべきである。本稿ではこの二点から “Petition” に接近し、新たな解釈の提示を試みたい。

“Petition”は先述したように他の短編との関連性がやや見えにくいですが、これの前後に位置する短編を考えあわせると、ある種の繋がりが明らかになる。第5番目の“Water-Message”は小学4年生の少年 Ambrose が河口近くの浜辺に打ち寄せられていた瓶の中に手紙を見つけるところで終わる。その手紙の1行目には“TO WHOM IT MAY CONCERN”，最後から2行目には“YOURS TRULY”（56）と記され、肝心の手紙文および署名が書かれてしかるべきスペースは空白になっている。誰かが悪戯で流した手紙なのだろうが、長い年月で褪色し、空白ができてしまった“MS. Found in a Bottle”でないと言い切れるだろうか。

この後に続くのが“Petition”である。嘆願者は自らの名前を名乗らず、“Yours truly，”（71）を以て嘆願書を終える。この点に注目すれば、嘆願書は Ambrose が見つけた瓶の中の手紙の正体であると考えてもよいだろう。この時、嘆願書はタイ国王の手に渡らずに瓶の中に閉じ込められたまま空しく波間を漂うデッドレターと化す。

第7番目の標題作“Lost in the Funhouse”において、「作者」は少年 Ambrose の性に目覚める頃を物語るのだが、同時に物語を創造する際の努力の軌跡も語っていく。どちらが主で、どちらが従とも言い難い。それこそ、シャム双生児のごとく物語とメタ物語が二者一体となった短編である。

Ambrose の性愛の対象は兄のガールフレンド Magda である。嘆願者によく似た内省的で想像力豊かな Ambrose、嘆願者の双生児の片割れに似た、がさつな兄 Peter、そして Magda の三人はいわば三角関係にあるが、そう思っているのは Ambrose だけで、二人は彼の気持に気づいていない。彼らは、かのシャム双生児の三角関係を再演しているのである。

少年 Ambrose は長じて「作者」になった、と考えるのがもっとも自然である。そうになると、作家 Ambrose は幼い日に海から受け取った手紙の空白を“Petition”を書くことで埋めてみせたということになるだろうか。連作集の最後に置かれた“Anonymiad”では、流刑にあったギリシアの無名の詩人が作品を山羊皮に認め、アンフォラに入れて海に流す。まさにギリシア版「瓶の中の手記」である。連作集は第1番目の“Frame-Tale”——これは表裏に“ONCE UPON A TIME THERE WAS A STORY THAT BEGAN”（1-2）と印刷されたメビウスの輪である——によってメビウスの輪のような円環的構造を予め枠付けられているから、アンフォラは時間を飛び越えて少年 Ambrose のもとに流れついた、という解釈も可能だ。「瓶の中の手記」とは、文学の歴史という大海の中を漂い、生き抜いてきた先行作品の謂であり、作家の仕事とは先行作品をなぞり、その可能性を尽きつくし、間隙を現代的想像力で埋めること——連作集執筆当時、Jorge Luis Borges の影響を受けていた Barth がこのような文学観を持っていたことは、彼のエッセイ“The Literature of Exhaustion”（1967）を読めば明らかである。

さらに5, 6, 7番目の短編たちに存在するかすかな響きあいも見逃せない。“Water-Message”では南部小説特有のグロテスクさをたたえた双生児 the Arnie twins が弱虫の Ambrose を脅やかす。また“Lost in the Funhouse”において、家族とともに遊園地へ出掛けた彼は、Fat May という呼び込み用の人形を見る。異常に太って、機械仕掛けでけたたましく笑う人形は、シャム双生児が見世物にされた一時代前のフリーク・ショウを彷彿させる。これらの短編にたゆたう余情は、連句の匂いづけよろしく、三編をほどよく関連づけるのである。

以上のように他の短編の世界との間を行きつ戻りつしながら考えあわせていくと、“Petition”の連作集における位置と意味は明確になるし、逆に他の短編も“Petition”の存在によってより豊

かなコノテイションを獲得する。この連作集はそのように出来ている。

2

さて、以上をふまえたうえで、まず注目したいのは「二重体児」としての嘆願者兄弟のありようである。シャム双生児のどちらが兄で、どちらが弟か、決められるはずもなかろうし、長幼の序をつけることはまったく無意味であるが、ここでは便宜上、嘆願者を弟、もう一人を兄としておく。AmbroseとPeterの兄弟関係が投影されていると考えられるからである。兄と弟はなにもかも正反対である。弟が述べるとおりに兄弟に付随する形容の言葉を並べてみる。兄は“gross”, “incoherent but vocal”, “ignorant but full of guile”, “gregarious”である。楽器を演奏し、下手な詩を書き、踊る。放屁やげっぶなど、肉体レベルでの騒がしさに溢れ、なによりも好色である。そして、“More to the point, what intelligence my brother has is inclined to synthesis....”と弟は言う。一方、弟は“slight”, “articulate and mute”（もっとも囁き声は出せる）, “educated”, “ingenuous”である。アリストテレス、シェイクスピア、バッハなどをよく知るが、摂食や排泄を含む生物的な営みを行う力はまことに弱い。そして、彼の知性は“analysis”へと傾く(62-63)。確かに二人は相反する価値を体現している。たとえば、肉体/精神、感情/理性、総合/分析。さらにM. F. Schulzによればid/ego, doer/dreamer, extrovert/introvertという価値もつけ加わる(398)。二人は不可分であるというのだから、たとえば、一人の人間のうちに潜むさまざまな二面性を表す、と解釈しても差し支えないだろう。

しかしながら、ここでは二人の肉体の結合の仕方に焦点をあてたい。彼らはきわめて短い肉の紐によって前後に結合している。弟の腹部は兄の背中中のウェスト部分にくっつき、“a vaudeville horse”(61)のように二人はいつも行動を共にしなければならない。それで体力のある兄が常に弱々しい弟を引きずっていく形となる。

ところで、Barthが敬愛する先輩作家たちの手になる、つまり、Barthにとっての「先行作品」の中のシャム双生児たちは、現実にはありうる形態において結合している。Leslie Fiedlerの*Freaks*(1978)によれば、Mark Twainは頭と両腕は二人分あるが胴体と足は一人分しかない実在のthe Tocci Brothersの宣伝ポスターを見て、*Those Extraordinary Twins*(1894)を書くことになったという(212)。Twainは彼らの姿をそのまま主人公兄弟に適用している。Vladimir Nabokovもシャム双生児を描いた。*Nabokov's Dozen*(1958)の中の短編“Scenes from the Life of a Double Monster”におけるLloydとFloydの結合は、有名な実在の双生児ChangとEngの結びつき方と同じものだと推測できる。それにひきかえ、腹部と背中中で結合する双生児は、“no wonder he [the brother] denies me, agrees with the doctors that such a union is impossible....”(61)と嘆願者が述べているように、現実には存在しないのではないだろうか。ちなみに*Freaks*にはいくつかのタイプの二重体児の写真と絵が掲載されているが、嘆願者兄弟と同じ形で結合する姿は見当たらない。この形はBarthの想像力の産物であろう。

この結合の形は何を意味するのだろうか。嘆願者は我が身の惨めさと比べるために、ChangとEngを引き合いに出す。ChangとEngは胸のところで比較的余裕をもって結合しており、共有する臍が“an emblem of their fraternity”(60)と考えられるほど折り合いよく生きた、と彼は言う。ただし、実際には彼らは大酒のみと禁酒主義者、ギャンブラーと賭け事嫌い、といった具合に差異があったことを彼は忘れずに付け加える。しかし、営業用ポーズであるにせよ、少なくともChangとEngは仲良く肩を組むことが出来たらしい。ところが嘆願者兄弟の場合、兄が弟を引きず

るか、その報復として弟が兄の背中に乗り肩車の姿勢をとるか、どちらかである。これは上下関係あるいは優劣を競う関係を暗示する結び付き方である。

そして、弟は以下のようにであれば兄弟の関係がうまくいくのに、と願う。

Only let me count cadence and him go more regularly, there'd be no stumbling; I could prod, tickle, goose him into action if he'd not ignore me; I'd be the eyes in the back of his head, his unobserved prompter and mentor. (62)

つまり、弟は兄の行動を司る頭脳、精神、理性になりたいのである。この連作集の前に発表した *Giles Goat-Boy* (1966) において、Barth は、足の不自由な天才的学者 Dr. Eierkopf が肉体だけの存在としか思えない巨漢 Croaker に肩車されて文字どおり Croaker を手足として用いる様子を描いている。弟はどうやら兄を従順な Croaker のごとき存在に仕立てたいようである。精神や理性が肉体や感情を支配し、統制するべきだと考えているのだ。

しかも、弟は自分を無視し、ショウの上演中にソロ・パフォーマーを気取る兄への報復として、兄の背中ごしに嘲りやぶち壊しとなるような動作を観客に向かってしてみせる。嘆願者は常に自分を正当化し、兄の犠牲者であるかのようにタイ国王に訴えるが、彼の反抗ぶりは彼が言うほど弱々しいものではないし、すべてが正当というわけでもない。兄弟に id/superego という二項対立をも読み取る学者がいるが (Tobin 94)、それでは、たとえば、あの “William Wilson” とこの作品との差異が見えなくなる。確かに兄は id の命じるままに行動するし、嘆願者も良心を表すもう一人の William Wilson 同様、囁き声しか出せないけれども、それは彼が良心すなわち superego と関係するからではなく、後述するように彼が文字＝記号へ傾斜することと関係するためである。報復し、あわよくば優位に立とうとし、肩に乗り続ける弟を兄はいろいろと罵るが、それをまったく理不尽な罵りとも思い難い。兄にしてみれば、弟は傲岸でしかないであろう。

嘆願者兄弟の特殊な結合の仕方は、重要な特色をもうひとつ生じさせる。それは視覚に係わる特色である。兄は弟を常に背負う形であるから弟が見えない。弟は “In consequence he never lays eyes on the wretch he forever drags about...” (61, italics added) とその事実を述べる。ひとつ前に引用した箇所でも、もし兄が自分の言うことを聞いて行動すれば、自分は兄の後頭部についた “eyes” になれるのに、と嘆願者は言っている。“eyes” という語は、実は作品中に何度も使用されている。“eye(s)” は “I” に通じ、アイデンティティの確立を希求する弟の気持を伝える語とも受け取れるが、それ以上に弟が「見ること」に長け、兄がその逆であることを暗示する語と考えたい。

弟は兄の肩と背中ごしではあるが、世の中を見ることができし、兄に知られずに兄を見る有利性を持つ。のみならず、彼は可視的記号に頼り、それを操る者である。“mute” であり、囁き声しか出せないから、常に “No-sign” の紙を携行し、兄の求婚を承知しそうになった愛する女性 Thalia に対して、拒否せよとばかりにその紙を投げる。また、先述したように兄のショウを台なしにする目的で嘲りの動作を観客に向かって示すが、この時、彼自身が記号として機能すると言えよう。そして、なによりも嘆願書を書くことで、彼は文字という記号を操っているのである。「見ること」に長ける、とは、どうやら文字＝記号をうまく操る能力と同一であるようだ。

彼が、Thalia の中にもう一人の Thalia がいるのではないか、と気づくのも視覚による。兄弟と彼女が互い違いに、つまり “like shoes in a box or the ancient symbol for Yang and Yin” (70) と形容される状態で寝ていたとき、Thalia の顔が上下逆さまに彼の眼に入る。「いにしえの陰陽の象

徴」とはいわゆる太極図のことである。陰陽を表す二つの曲玉状のものが互い違いに円になるべく組合わされた図で、韓国の国旗の図柄にも用いられている。この姿勢で寝ていたとき、彼には閉じられた上下逆さまの Thalia の眼が、見開いてじっと自分を見つめるもう一人の Thalia の眼に見える。すなわち “a Thalia within a Thalia like the dolls-within-dolls” (70) を発見するのである。ついでながら、この入れ子細工の比喻は、第13番目の短編 “Menelaïad” の構造と呼応していることも付け加えておこう。

ところで、Thalia とは何者であるのか。筆者は先にこの短編にはギリシアの英雄は登場しないと書いたが、もしギリシア神話との関連を求めるとすれば、彼女の名前にそのよすがはある。Thalia という名前のギリシアの女神は二人いる。美の女神 Graces のうちの「花の盛り」を意味する女神と、詩神 Muses の一人、喜劇のマスクを持ち、喜劇を司る女神である。嘆願者がもう一人の Thalia を発見することは、マスクを持つ詩神の名前に即したことであったのだ。そして、彼女が美神であり詩神であり、かつ、嘆願者が文字=記号を操る者であることに注目すれば、この短編もにわかにはメタフィクションの様相を帯びて見える。(ここではその指摘だけに留めておく。)

嘆願者は一つの肉体に二人の人間が存在すると気づいた。これは彼にとって新しい発見であるが、決して新しい認識ではない。これまでにも彼は自らの一対の肉体に二つの人格を見つめ続けてきたのであるから。そして、彼は自分たち兄弟の優劣を峻別し、優れている自分を選択して兄を拒絶してきた。Thalia についても同様の手順を適用する。夜になると出現する第二の Thalia の方を優位に置き、心を寄せる。二を見て、峻別し、選択する——それが弟のやり方である。

それにひきかえ、兄は Thalia の中にもう一人の女性を見ることはないし、弟の存在を否定して自分一人であるかのように振るまう。弟との確執にピリオドを打つ手段も、分離手術ではなく弟を干からびさせ、“absorb” (69) する、つまり自分の体内へと吸引することではかろうとする。兄を一元的とすれば、弟は二元的である。後述する東洋思想との関連で言えば、兄は東洋的であり、デカルト以来の近代合理主義を身につけているという意味で、弟は西洋的である。兄の知性は “synthesis”，弟のそれは “analysis” に傾く、と嘆願者は言っていた。兄よりも弟の方が「見える」のは、もっぱら彼が二元的分析的な認識方法を採用ゆえなのである。考えてみれば、彼が得意とする文字=記号、さらにその根本である言語そのものは、本来的に分析的営為の所産にはかならない。

3

しかし、博識なる嘆願者は自分の認識方法と異なる方法がこの世にあると知っている。東洋思想である。彼は Chang と Eng に関連させて、東洋の宗教と哲学を次のようなものとして述べている。

... sons of the mystical East, whose religions and philosophies—no criticism intended—have ever minimized distinctions, denying even the difference between Sameness and Difference. (61)

「同一性と差異とは違うものだということさえ否定する」思想とは、二項対立を否定する非分析的な一元的思想にほかならない。嘆願者が第二の Thalia を発見したとき、恋人たちは太極図の形で寝ていたわけであるが、太極図とは東洋の、正確に言えば古代中国の道教などの哲学が生み出した象徴である。陰陽未分、すなわち「陰極まって陽となり、陽極まって陰となる」を表す。陰と陽が「一にして二、二にして一」と互いに入れ替わる様子を可視的に示し、二項対立の不可能性を説く。

その意味では太極図は表裏未分のメビウスの輪と似ている。

嘆願者は太極図の形に自らの身体を位置させたとき、いわば一の中に二の存在するを見た。しかし、彼はそこで留まった。自分の認識方法を変えようとはしないのである。東洋思想に最大限接近していながら、一と二の間に区分を立てずにはいられないのだ。

嘆願者が宛名人とするタイ国王 Prajadhipok はそのような東洋思想の体現者である。彼は自分たちが “a figurative Bangkok” (58) に住んでいるという理由、あるいは国王には特権があるという理由で、タイ国王に嘆願すると語っているが、国王はたんなる宛名人としてだけでなく、まことにメタフォルカルな存在として嘆願者に意識されている。

Prajadhipok は実在の国王で、1931年白内障の手術のためにアメリカに滞在した (Morrell 86)。手術は成功したという。(Morrell 172)。この事実のみならず、嘆願者が言及するバンコク王朝 (Chakkri 王朝) に関する事柄はすべて史実と合っている。嘆願者が国王を東洋思想の体現者と見なしていることは、以下の宛名に添えた形容辞から伝わってくる。

His Most Gracious Majesty Prajadhipok, Descendant of Buddha, King of North and South, Supreme Arbiter of the Ebb and Flow of the Tide, Brother of the Moon, Half-Brother of the Sun, Possessor of the Four-and-Twenty Golden umbrellas (58)

「北と南」や「引き潮と上げ潮」といった二項対立を統括し、太陽と月を兄弟に持ち、宇宙的規模で世を統べる仏教徒の王である、と彼は国王を見なしているのだ。実際、タイの専制王権を有する「王は『仏典の帝王』であり、『神なる王者』として神聖不可侵の存在である」(河辺 141) とのことだから、嘆願者が以上のような形容辞を用いても何の不思議もない。

しかし、国王は東洋思想の体現者だけの存在に留まっていない。嘆願者はこう続ける。

My brother ... has even claimed (in his cups) descent from the mad King Phaya Takh Sin, whose well deserved assassination — like the surgical excision of a cataract ... gave to a benighted land the luminous dynasty of Chakkri, whereof Your Majesty is the latest and brightest son. (58-59)

King Phaya Takh Sin も実在した王である。一代で王朝を築き、在位期間中 (1767年～82年) 国内の平定につとめたが、晩年精神錯乱に陥った (石井 223)。彼は暴政を行ったため処刑され、Chakkri が即位し、ラーマ一世と称してバンコク王朝 (Chakkri 王朝) を開く。その後のラーマ五世からタイの近代化が始まり、啓蒙的専制王権は Prajadhipok (ラーマ七世) まで続く (河辺 151-54)。

嘆願者は、Takh Sin の治めたタイは「文化の遅れた国」であったのに対して、Chakkri の王朝は「啓蒙的王朝」である、と評する。彼の中では、兄は Takh Sin に代表される狂気、暴政、非文化的なるものに連なり、Prajadhipok は啓蒙的、理性的、近代的なるものの側にある。もちろん、嘆願者は Prajadhipok の方に近い。蒙昧なる Takh Sin は「白内障の摘出手術のように」暗殺され、切り捨てられて当然、という物言いの中に、兄をもそのように切り捨てたく思う彼の気持が伝わってくる。

啓蒙的な国王 Prajadhipok は嘆願者に近いが、それでも国王が東洋思想を有するかぎり、彼には他者でしかない。国王の白内障はそれを示す重要なメタファーである。嘆願者にとって、国王は

あくまで「盲目」なのである。我々はすでに「見ること」の意味を明らかにしたが、その意味を再度確認し、同時に国王の「盲目」の内容を知るために以下の箇所を引用する。

The reign of the Chakkris began in violence and threatens to end in *blindness*; my own history commences with a kind of *blindness* and threatens to terminate in murder. (59, italics added)

ここでは Prajadhipok に対して、そして嘆願者自身に対して、はっきりと “blindness” という言葉が使われている。Chakkri 王朝が「盲目のうちに終わりそうな気配である」という前半部分には1931年当時の現実のタイ情勢がふまえられている。翌1932年に立憲クーデターが発生すると、「眼疾治療を名目として」(石井 280) Prajadhipok は渡英する。1935年に彼は退位し、タイは立憲君主国となる。つまり、1931年当時、タイはさらなる西欧的な近代化への道を歩みつつあり、そこでは Prajadhipok は古きものとして相対化される途上にあったというわけである。

引用箇所の後半部分において、嘆願者は「自分の生涯は一種の盲目状態のうちに始まった」と言っているが、この「盲目」は、もちろん、物心つかぬ状態、自他未分(兄弟未分)の状態を指すと考えてよいだろう。この引用箇所の少し後で、彼はまったく同じ内容のことを “In earliest babyhood I didn't realize I was two...” (64) と表現していることも、この判断の根拠である。彼によれば、自分が “two” であることを知るまえ、彼は「盲目」であったのだ。彼の見地からすると、二元的分析的な認識の出来ない者は “blindness” のうちにある。そうすると、たとえば白内障の手術が成功しても、Prajadhipok は「盲目」であり続ける。タイ国王は非合理的な東洋思想の持主であり、十分に近代的とは言えぬ専制君主であるのだから。Takh Sin の王朝が狂気のうちに終わったように、Chakkri の王朝も「盲目」のうちに終わりそうな気配である。嘆願者にとっては、Takh Sin も、兄も、そして Prajadhipok も、「狂気」あるいは「盲目」という、いずれにせよ不条理なる力に搦め捕られた他者なのである。

嘆願者は最後に次のように言う、“To be one; paradise! To be two; bliss! But to be both and neither is unspeakable.” (71) と。彼は自らの状態をいみじくも「一であり二でもありながら、一でも二でもない」と明言しているわけだが、この状態はすでに見てきたように太極図の象徴するところのものにほかならない。東洋思想のにとれば、この状態はこの世の万物のありようだ。しかし、嘆願者には「言うに言われぬほどの苦しみ」である。彼は分離手術を要求するしかないのである。

以上のようにタイ国王と東洋思想の役割に注目すると、シャム双生児が西洋思想/東洋思想という二項対立をも体現していると考えられる。ただし、もちろん彼らが不可分であるがゆえに、そして作品中に厳然と存在する太極図のイメージのおかげで、せめぎあう二つの思想もまた所詮人間の思想というものの裏と表、太極図の中で互いに入れ替わり続ける陰と陽でしかない、という最終的な結論が得られることを忘れてはならない。

この短編発表の4年前の1964年に Barth は “Mystery and Tragedy: the Twin Motions of Ritual Heroism” という演題で神話の英雄の行動パターンについての講演を行った。1960年代といえば、西洋文明に倦み、東洋思想に救済を求めてインドや日本に渡ったアメリカの若者たちがいた時代である。Barth はそのような若者ではなかったが、Joseph Campbell などの神話学や比較宗教学を学ぶうちに、仏教についての知識も得ていたようだ (*The Friday Book* 42-44)。彼はこの講演の中で仏教に対する見識を示し、東洋の神秘主義者を以下のように表現している。

He [the mystic] sees that seamless nature knows nothing of the concepts and distinctions by which the “waking” consciousness apprehends her; that ... I and thou, male and female, subject and object, good and evil, self and Buddha-self, are all aspects of the same thing, of the One. (*The Friday Book* 49)

これはまさしく “Petition” において東洋思想として言及されていたものの内容と重なりあう。そして、この講演の結論部で、彼は大筋において次のように語る。神話の英雄の冒険の旅には、まず東洋（すなわち mysticism の世界）へと向かい、やがて西洋（すなわち tragedy の世界）へと円環的に戻るといった行動パターンが見られる、しかし、その道の半ばに東洋と西洋という “philosophical hemispheres” が重なり合い、区別をなくす地点がある、さらに最終ゴールにおいて tragedy は終わるが、そこは mystery が始まる場でもあると想像し、希望してよい、と (*The Friday Book* 53-54)。tragedy と mysticism は円環的に、しかもその区別をなくす二点を有する形で結合しているというのだ。彼は太極図という言葉こそ持ち出していないが、英雄の行動パターンにおけるそれらは、まるで太極図における陰陽のごとくある、と言っているようなものである。

Barth はこの時期に東洋と西洋の哲学の差異にこれだけ関心を寄せていたのである。そうしてみると、“Petition” とは、西欧の近代的合理的知性が自らの優位性をいまだ信じて、空しく発する悲痛な叫び声であると考えても間違いなさそうである。

Works Cited

- Barth, John. *The Friday Book: Essays and Other Nonfiction*. New York: Putnam, 1984.
- . *Lost in the Funhouse: Fiction for Print, Tape, Live Voice*. Garden City, N.Y.: Doubleday, 1968.
- Fiedler, Leslie. *Freaks: Myths and Images of the Secret Self*. New York: Simon, 1978.
- 石井米雄 『世界の歴史 14 インドシナ文明の世界』東京、講談社、1977.
- 河辺利夫 『世界の歴史 18 東南アジア』東京、河出書房新社、1969.
- Morrell, David. *John Barth: An Introduction*. University Park: Pennsylvania State UP, 1976.
- Rogers, Robert. *A Psychoanalytic Study of the Double in Literature*. Detroit: Wayne State UP, 1970.
- Schulz, Max F. “The Thalian Design of Barth’s *Lost in the Funhouse*.” *Contemporary Literature* 25.4. (1984): 397-410.
- Slaughter, Carolyn Norman. “Who Gets Lost in the Funhouse.” *Arizona Quarterly*. 44.4. (1989): 80-97.
- Tobin, Patricia. *John Barth and the Anxiety of Continuance*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1992.